

<ワークショップ報告>

I-A 「総合的な初年次教育プログラムを編成する」

担当者 : 杉谷祐美子(青山学院大学)

概要 : 本ワークショップは、2008年度、2009年度に実施したワークショップの続編にあたる。日本の初年次教育は各大学に普及し、多様な実践活動が蓄積されつつある「第2ステージ」を迎えた。具体性を帯びた多くの課題を抱えるなか、初年次教育の多様なコンテンツを整理し、より効果的な教育内容・方法を精選したうえで、総合的なプログラムの開発を求める声が大きいが、本ワークショップにおいては、これまでの参加者から提案された初年次教育の到達目標やコンテンツを整理し、それらに基づき、フロアとともに総合的な教育プログラムの編成を試みた。個人作業、協同作業を通して、初年次教育のコアになる総合的なプログラムを3科目で編成し、グループワークでは特に各科目の到達目標や内容をできるかぎり具体的に検討し、プログラムの特徴や配慮した点を記入してもらった。こうしたアクティビティの成果を参加者全員で共有し、初年次教育の基本的なコンテンツとプログラム開発の指針を探ることを目指した。

キーワード : 初年次教育, 教育プログラム, コンテンツ, 総合的, 開発

I-B 「どのように初年次教育の組織的導入をはかるか」

担当者 : 濱名 篤(関西国際大学)

概要 : 多数の大学が初年次教育の導入をするようになり、初年次教育自体についての一定の理解は得られるようになってきたが、初年次教育導入にあたり、学内でどのように SWIH(なぜ?誰が?何を?いつから?どこで?どのように?)の疑問に答えるかという問題解決志向のワークショップを開催した。高大接続との関係も含めた初年次教育の必要性をどう説明し学内で納得してもらうか、どのような体制作りをすればいいのか、どのような人が中心になり、どのような準備やFDをしてスタッフを確保していくのか、どのようにしてプログラム内容を決めていくのか、そのためにどのような教材や方法論を選択していけばいいのか、どのような評価プランを考えるのか等、初年次教育のプログラムづくりと組織運営について、参加者自身に自らの経験を問いながら能動的に参加してもらった。

キーワード : 高大接続, 組織的導入, FD, 教材, 学習成果

1-c 「『身体知』の導入一言語と非言語のワークショップ」

担当者 : 武藤浩史(慶應義塾大学)・横山千晶(慶應義塾大学)

概要 : 身体を見据えたコンテンツをどのようにカリキュラムの中に意識的に取り入れていくのかは、高等教育の各分野で現在真剣に思考され試行されているテーマである。昨今、大学だけでなく、中学校や高校レベルでもサービス・ラーニングやボランティアを積極的にカリキュラムの中に入れていく傾向があるものの、いまだ座学と経験は分離してとらえられがちである。また体験したことを言語によりふたたび発信していくための方法論も十分に議論されてはいない。この身体ワークショップでは、共に体を動かすことを通して、自らの身体感覚の「気づき」と他者との協働を促し、同時に、からだと言葉をつなぎ合わせることにより、初年次より大学生にふさわしい言語力を構築する方法を模索した。

キーワード : 身体知, からだと言葉, コミュニケーション

1-d 「協同学習の考え方と進め方」

担当者 : 安永 悟(久留米大学)・藤田哲也(法政大学)

概要 : 近年、大学教育において協同学習の有効性が広く認められつつある。協同学習とは一般的なグループ学習とは違い、教授学習理論であり、理論に裏打ちされた学習技法である。学習仲間と共有した学習目標を達成するために、小グループやペアと一緒に学ぶことである。言い換えれば、小グループの教育的使用であり、学生が自分自身の学びと仲間の学びを最大限にするために共に学び合う学習法である。したがって、学生を小グループに分けただけでは協同学習に期待される本来の教育成果を得ることはできない。そこで、本ワークショップでは協同学習の理論的な背景や一般的なグループ学習との違いを理解し、大学の授業に協同学習を導入する際の具体的な方法や注意点を上げ、協同学習の簡単な技法を活用しながら、参加メンバーと共に体験的に学ぶことを目的とする。

キーワード : 協同学習, 大学授業, 構成的教授学習観, 大学適応, 学習スキル

II-A 「FD・SDアクティビティ体験」

担当者 : 足立 寛(立教大学)・白尾吉晴(日本女子大学)

概要 : 「FD・SD アクティビティ」とは、企業研修などで取り入れられている簡単なゲーム形式の様々なアクティビティを学校教職員の学び用にアレンジしたものである。演劇ワークショップ等がベースになっており、コミュニケーション能力やチームビルディングの要素についての気づきに有用な手法となる。今回のワークショップでは、FD 関連としては学生の授業参加意識の向上に、また SD 関連としては協働意識の向上に使えるようなちょっとしたネタを四つほど紹介した。各アクティビティを体験された参加者にとっては、初年次教育(正課外授業含む)での活用例を共に考える良い機会の場となってもらえたのではないかと思う。

キーワード : 教職協働, 参加意識

II-B 「人文・社会科学系学部における『読む力』を重視したプログラムの設計」

担当者 : 沖 清豪(早稲田大学)

概要 : 本WSは、人文・社会科学系の学部において、「読む力」に焦点を置いた演習活動を進める場合に必要となるプログラム、教材、および教員の指導力について、参加者の経験を積み上げて何らかの展望の獲得を目指すものである。技能習得に特化した初年次教育が困難な状況にある(伝統的)大学の場合、対案として新入生が是非読んでおきたい書籍のリストを作成して、読書量を増加させつつ「書く力」ないし「話す力」の育成を目指すことが想定される。当日はグループごとにリストに掲載すべき書籍、およびそれを利用した指導方法を提案しあい、参加者間での建設的な意見交換を目指した。具体的には、①初年次学生が読むべき書籍を数冊提案しあい、②それらを活用する指導方法について意見交換を行った。

キーワード : 読む力, 古典, 人文・社会科学系学部, アカデミック・スキル

II-C 「実行性・実効性のある初年次教育を実現する」

担当者 : 菊池重雄(玉川大学)

概要 : 形態こそさまざまだが、いまでは多くの大学が初年次教育を導入し、そのなかには他大学の模範となる優れたプログラムや実施組織をもつ大学も少なくない。その一方で、学長や学部長が示す初年次教育のビジョンを、現場の教員は適切に受け止め、自らの教育的使命として実践しているといえるだろうか。研究志向や自分の城意識が強いといわれる教員が納得して初年次教育を実践しているといえるだろうか。初年次教育のビジョンやプログラムがどれほど優れたものであっても、また組織体制がどれほど堅固に構成されていたとしても、現場で働く一人ひとりの教員が納得して、能動的・積極的・創造的にかかわらない限り、初年次教育の果実を豊かに実らせることはできない。ここでは、ともすれば性善説でとらわれがちな教員観(この人たちならうまくやってくれるだろう、やってくれるはずだ)を批判的にとらえ直し、実際に機能する初年次教育の体制をつくるにはどうすればよいかを、「ミドル・アップダウン」と「フェア・プロセス」の二つのマネジメント・ツールを紹介しながら参加者とともに考察した。

キーワード : 初年次教育のビジョン, 初年次教育の現場, 実際に機能する組織, ミドル・アップダウン, フェア・プロセス

II-D 「文章表現科目を開設・実施するために」

担当者 : 中村博幸(京都文教大学)・成田秀夫(河合塾)

概要 : 初年次科目として開講される「文章表現科目」は多様な形態がみられる。一方開設にあたり、開設担当者になった教員や、授業を担当することになった教員の中には、様々な開講状況や授業の組み立てノウハウに疎い教員も少なくない。そこで、科目開講にあたって、「なにを(科目内容), だれに(学生の現状), どのように(教授法)」教えるのかを確認し、それに基づいたカリキュラム設計(コマシラバスの設計)をどうすればよいかについて、ワークショップ形式の研修を通して学んだ。

キーワード : 文章表現, カリキュラム設計, 授業設計

II-E 「初年次教育の評価の方法を考える」

担当者 : 山田礼子(同志社大学)

概要 : 初年次教育の評価には、さまざまな方法がある。例えば、学生調査、授業評価、プログラム評価、ポートフォリオ評価等が代表的な評価法である。こうした方法のどれが適切であるか、どれが効果的であるかは学生の特徴やプログラムの性質によって異なると思われる。言い換えれば、多様な大学や多様な学生の存在により、適切な評価方法も多様であるともいえる。本ワークショップでは、参加者が自分の大学の初年次教育を通じて使用あるいは利用している評価方法を互いに紹介しながら、その特徴、利点などをより深く分析することによって、自分の大学に他の評価方法を取り入れていく可能性について考える過程を経験してもらった。

キーワード : 初年次教育, 評価方法, 学生調査, 授業評価, プログラム評価